

## 障害者スポーツボランティアの意識変容に関する研究

～ボランティアの役割構造に着目して～

山田 力也 (西九州大学)

### 1. はじめに

今や各種スポーツイベントは、障害者スポーツイベントに限らずともそれを支えるボランティア抜きには開催実現が考えられないほど重要な役割を担っていることは周知の事実である。このような状況に応じて、ボランティアおよびその活動に関心が集まると同時に、様々な視点からの評価、研究による報告がなされてきている。各種スポーツ活動におけるボランティアをスポーツボランティアと呼ぶが、これまで、スポーツボランティアに関する研究は、綿ら(1989)や山口ら(1989)、そして長ヶ原ら(1991)によるスポーツボランティアの活動継続意欲を規定する要因に関する研究。スポーツボランティアの活動状況や活動意識に関連したものとしては、松尾(1998)の研究や工藤ら(1995)の調査報告が挙げられる。さらには、スポーツボランティアの関係を「する/受ける」の関係とした場合、これまで「する」側に着目したものが主であったが、逆に「受ける側」に着目した萌芽的研究が松尾(1997)や山田(2002)によっても報告されている。しかし、これらの研究にはスポーツボランティア活動を経験することによって変化するであろうボランティア活動者自身の意識「ボランティア活動者個人の意識変容」に着目した研究はほとんど見られない。

ボランティア活動者個人の変容について、川元<sup>1)</sup>は、ボランティア活動者個人の変容はボランティア活動が特定の対象に及ぼす影響(効果)のひとつに過ぎないということを前提にしつつも、「ボランティア活動の活動者個人に対する影響」の実証的研究の必要性を説いている。

### 2. 研究の目的

そこで本研究では、スポーツボランティアにおけるボランティア活動者個人の意識の変容を探るべく、2002年に開催された「2002年世界車椅子バスケットボール選手権大会・北九州(以下、ゴールドカップとする)」を支えた障害者スポーツボランティア活動者を対象に、障害者スポーツボランティアがそれに従事するボランティア活動者の意識にどのような変容もたらすのかを検討する。

### 3. 調査の概要及び質問項目構造

#### 1) 調査概要

本研究では、「ゴールドカップ」における一般ボランティア参加者883名を対象に、大会開催後の同年11月1日～11月25日の期間に質問紙を用いた郵送法による社会調査を実施した。

その結果、回収数は411部、回収率は46.5%であった。そのうち、以下の分析に耐えうる質問紙、有効回答数は361部だったことから、有効回収率は40.1%である。

#### 2) 質問項目構造

##### ① 基本的属性

「性別」、「年齢」、「ゴールドカップ以前のボランティア活動の有無及び、活動頻度」を設定した。

##### ② 障害者スポーツボランティア活動によるボランティアの障害者意識測定尺度の設定

川元<sup>1)</sup>は、「ボランティア活動による活動者個人の変容」の代表的な検討視点を提示<sup>註1)</sup>している。これらの視点を検討する上での測定尺度の中でも、同氏ら<sup>2)</sup>による「学習個人が(福祉教育・ボランティア学習活動の結果として)即時的に変容する具体的な行動、態度、志向に関する項目(全47項目構成)」は、本研究の「障害者スポーツボランティア活動によるボランティアの意識変容」を測定するにあたり最も有効であることが想定される。よって、この川元らの測定尺度から選択した16項目と、新たに1項目加えた全17項目を質問項目として設定した。

##### ③ バリアフリー意識

上記②を補完する上で、ボランティアのバリアフリー意識についての質問項目を設定した。

### 4. 分析方法

本研究の目的を検討すべく、得られたデータを分析するにあたり、ボランティアの役割構造(具体的活動内容)に応じて想定されるクライアントとの空間的・関係的な近接性を基にグループを設定した。1つ目は、クライアントと直接的に関係を持つ(空間的・関係的に近い)グループ「直接的ボランティア群(選手帯同係、選手村サービス係など5つの係)」、逆に、クライアントとの直接的な関係を持つことが無い(空間的・関係的に遠い)グループ「間接的ボラ

ンティア群(総務係、AD 係など 10 の係)」、最後に、その両者でもないグループ「中間的ボランティア群(入場券販売、インフォメーション係など 6 つの係)」の 3 グループである。

そして、それぞれのグループを独立変数、各質問項目を従属変数としたクロス集計を実施した。なお、集計・分析には SPSS for Windows を用いた。

## 5. 結果及び考察

### 1) 基本的属性

まず、性別では、全体で女性 76.3%、男性 23.7%であった。グループ別では、どのグループも女性の割合が 7 割を超えているが、直接的ボランティア群に占める女性の割合が 85.6%と他のグループより高くなっている。また、全体の平均年齢は、35.7 歳 (SD=18.4) であり、直接的ボランティア群 32.8 歳 (SD=15.5) と間接的ボランティア群 41.6 歳 (SD=17.2) の差は約 11 歳である。

### 2) ボランティア活動状況

ゴールドカップ以前の活動の有無について、各グループともに 6 割を超える値を示した。しかし、カイ二乗検定の結果、有意差は認められていないものの、各グループの「週 1 日以上(週に 3 日以上+週に 1~2 日)の定期的ボランティア従事者は、直接的ボランティア群 14.3%、中間的ボランティア群 21.3%、間接的ボランティア群 29.1%となっており、間接的ボランティア群の活動頻度の値が高い。

### 3) 障害者スポーツボランティア活動前後の障害者意識

さて、障害者スポーツボランティア活動はボランティアの障害者意識にどのような影響を及ぼすのだろうか。ここでは、上述した通り、川元らの測定尺度を参考に、障害者意識を測定するに妥当だと考えられるものを 17 項目設定し、それぞれに対するボランティア自身の意見を「1.とても、あてはまる」から「5.まったく、あてはまらない」の 5 件法によって訊ねた。結果の分析にあたっては、回答カテゴリーを間隔尺度とみなし、それぞれの項目ごとに 3 群の平均値の比較検定(分散分析)を行った。結果を、「活動前」、「活動後」、そして「前後の差」の順で見えていくことにする。

#### (1) 活動前

まず、活動前の結果(表 1 参照)を見てみると、最も肯定傾向を示している項目は 3 群共に⑩「今の日本では、障害のある方が、今の自分と同じ生活をしようとすると、多くの困難に直面すると思う」となっている。3 群間の値の比較においては、⑧「障害のある方と接している自分が、世間からどう見られているかが気にならない」の項目のみ 5%の危険率で有意差が認められており、直接的ボランティア群により肯定傾向が認められた。しかし、各群の平均値の比較と、3 群間の値の比較において有意差が認められた項目が 1 つだけにとどまったことを勘案すると、全体的傾向としてさほど違いが見られない。

表 1. 障害者に対する意識(活動前)

	全体	直接	中間	間接	p
① 自分は、障害のある方に対して偏見を持っていない	2.33 (1.10)	2.41 (1.01)	2.33 (1.15)	2.24 (0.98)	n.s.
② 自分は、知らず知らずのうちに、障害のある方を差別していない	2.35 (1.12)	2.30 (1.01)	2.45 (1.17)	2.25 (0.99)	n.s.
③ 障害のある方は、自分とはあまり関係のない「別の世界の人」だと思わない	2.03 (1.07)	2.14 (1.16)	1.99 (1.03)	1.99 (1.05)	n.s.
④ 障害のある方は、自分とあまり違いのない「普通の人」だと思う	2.28 (1.10)	2.25 (1.08)	2.28 (1.05)	2.33 (1.22)	n.s.
⑤ 障害のある方と、もっと話したい、もっと相手を知りたいと思う	2.37 (1.03)	2.28 (0.96)	2.33 (1.09)	2.55 (0.99)	n.s.
⑥ 障害のある方が楽しそうな顔をしていると、自分もうれしくなる	1.84 (0.97)	1.83 (0.93)	1.86 (1.04)	1.81 (0.92)	n.s.
⑦ 障害のある方が困っているのを、他人事とは思えない	1.98 (0.99)	1.97 (0.98)	1.98 (1.02)	1.98 (0.97)	n.s.
⑧ 障害のある方と接している自分が、世間からどう見られているかが気にならない	1.98 (1.13)	1.77 (0.99)	2.18 (1.20)	1.88 (1.09)	*
⑨ 今の社会には、障害のある方が普通の生活をできないような、さまざまな障壁が多いことに気づいている	2.00 (0.96)	1.95 (0.90)	2.05 (1.01)	1.97 (0.97)	n.s.
⑩ 今の日本では、障害のある方が、今の自分と同じ生活をしようとすると、多くの困難に直面すると思う	1.66 (0.85)	1.75 (0.90)	1.71 (0.81)	1.49 (0.64)	n.s.
⑪ 建物入り口のスロープなど、障害のある方に配慮した設備があると自分もうれしくなる	1.94 (1.04)	1.92 (1.00)	2.04 (1.01)	1.79 (0.92)	n.s.
⑫ 障害のある方は、「障害者」と呼ばれると、「いい気にならないだろうな」と思う	1.84 (0.98)	1.83 (0.98)	1.94 (1.06)	1.69 (0.84)	n.s.
⑬ 障害のある方は、それぞれ人間として個性的な魅力があると思う	1.87 (0.94)	1.84 (0.88)	1.94 (1.01)	1.80 (0.89)	n.s.
⑭ 障害のある方に対して、「はれもの」にさわるような接し方はしない	2.60 (1.10)	2.52 (1.13)	2.54 (1.07)	2.79 (1.10)	n.s.
⑮ 障害のある方だからといって、遠慮ばかりするのではなく、人間として普通に接している	2.46 (1.05)	2.48 (1.07)	2.50 (1.13)	2.38 (0.91)	n.s.
⑯ 障害のある方が、世間から不当な扱いをされたのを見聞きすると、「なぜ、こんな社会なんだろう」と考えることがある	2.00 (0.94)	2.08 (0.96)	1.97 (0.97)	1.96 (0.89)	n.s.
⑰ 障害のある人にとって使いやすい設備は、だれにとっても使いやすいものだと思う	2.04 (1.09)	1.97 (1.07)	2.14 (1.14)	1.94 (0.99)	n.s.
平均	2.09 (1.03)	2.08 (1.02)	2.13 (1.07)	2.05 (0.96)	

\* $p < 0.05$

(2) 活動後

次に、活動後の障害者意識(表 2 参照)について、各群の平均値を見てみると、直接的ボランティア群 1.69 (SD=0.83)、中間的ボランティア群 1.84(SD=0.99)、間接的ボランティア群 1.88(SD=0.91)となっており直接的ボランティア群と他の 2 群に差が見られる。最も肯定傾向を示している項目は、直接的ボランティア群は⑥「障害のある方が楽しそうな顔をしていると、自分もうれしくなる」1.43(SD=0.62)となっているが、中間的ボランティア群と間接的ボランティア群はそれぞれ、1.56(SD=0.87)と 1.35(SD=0.60)の値で⑩「今の日本では、障害のある方が、今の自分と同じ生活をしようとすると、多くの困難に直面すると思う」となっている。さらに、3 群間の比較において有意差が認められた項目は、それぞれ①、④、⑤、⑥、⑧、⑫、⑭の 7 項目である。

表2. 障害者に対する意識(活動後)

	全体	直接	中間	間接	p
① 自分は、障害のある方に対して偏見を持っていない	1.87 (0.90)	1.84 (0.87)	1.76 (0.87)	2.07 (0.95)	*
② 自分は、知らず知らずのうちに、障害のある方を差別していない	1.92 (0.92)	1.82 (0.86)	1.94 (0.95)	2.03 (0.95)	n.s.
③ 障害のある方は、自分とはあまり関係のない「別の世界の人」だと思わない	1.63 (0.77)	1.59 (0.73)	1.60 (0.74)	1.74 (0.86)	n.s.
④ 障害のある方は、自分とはあまり遠いのない「普通の人」だと思	1.99 (1.15)	1.77 (1.02)	2.03 (1.16)	2.18 (1.24)	*
⑤ 障害のある方と、もっと話したい、もっと相手を知りたと思う	2.02 (0.99)	1.79 (0.77)	1.97 (1.05)	2.37 (1.00)	***
⑥ 障害のある方が楽しそうな顔をしていると、自分もうれしくなる	1.59 (0.88)	1.39 (0.63)	1.64 (0.96)	1.72 (0.95)	*
⑦ 障害のある方が困っているのを、他人事とは思えない	1.71 (0.85)	1.63 (0.73)	1.71 (0.91)	1.80 (0.88)	n.s.
⑧ 障害のある方と接している自分が、世間からどう見られているかが気にならない	1.78 (1.06)	1.57 (0.95)	1.93 (1.13)	1.74 (1.02)	*
⑨ 今の社会には、障害のある方が普通の生活をできないような、さまざまな障壁が多いことに気づいている	1.68 (0.83)	1.62 (0.76)	1.73 (0.89)	1.64 (0.78)	n.s.
⑩ 今の日本では、障害のある方が、今の自分と同じ生活をしようとすると、多くの困難に直面すると思う	1.47 (0.74)	1.43 (0.62)	1.56 (0.87)	1.35 (0.60)	n.s.
⑪ 建物入り口のスロープなど、障害のある方に配慮した設備があると自分もうれしくなる	1.58 (0.84)	1.46 (0.78)	1.69 (0.91)	1.54 (0.75)	n.s.
⑫ 障害のある方は、「障害者」と呼ばれると、「いい気がしないだろうな」と思う	1.71 (0.95)	1.57 (0.79)	1.86 (1.10)	1.64 (0.80)	*
⑬ 障害のある方は、それぞれ人間として個性的な魅力があると思う	1.59 (0.84)	1.51 (0.75)	1.62 (0.92)	1.62 (0.82)	n.s.
⑭ 障害のある方に対して、「はれもの」にさわるような接し方はしない	2.22 (1.03)	2.05 (0.99)	2.17 (1.01)	2.51 (1.05)	***
⑮ 障害のある方だからといって、遠慮ばかりするのではなく、人間として普通に接している	2.21 (1.06)	2.13 (1.02)	2.26 (1.18)	2.22 (0.91)	n.s.
⑯ 障害のある方が、世間から不当な扱いをされたのを見聞きすると、「なぜ、こんな社会なんだろう」と考えることがある	1.77 (0.89)	1.73 (0.75)	1.75 (0.99)	1.85 (0.86)	n.s.
⑰ 障害のある人にとって使いやすい設備は、だれにとっても使いやすいものだと思う	1.90 (1.07)	1.77 (1.00)	1.98 (1.15)	1.90 (1.00)	n.s.
平均	1.80 (0.83)	1.69 (0.83)	1.84 (0.99)	1.88 (0.91)	

\*\*\*p<.001 \*\*p<.01 \*p<.05

表3. 障害者に対する意識変容値(活動前-活動後)

	全体	直接	中間	間接
① 自分は、障害のある方に対して偏見を持っていない	0.46	0.57	0.57	0.17
② 自分は、知らず知らずのうちに、障害のある方を差別していない	0.42	0.48	0.51	0.21
③ 障害のある方は、自分とはあまり関係のない「別の世界の人」だと思わない	0.40	0.54	0.39	0.25
④ 障害のある方は、自分とはあまり遠いのない「普通の人」だと思	0.29	0.48	0.25	0.15
⑤ 障害のある方と、もっと話したい、もっと相手を知りたと思う	0.35	0.49	0.35	0.18
⑥ 障害のある方が楽しそうな顔をしていると、自分もうれしくなる	0.25	0.44	0.22	0.09
⑦ 障害のある方が困っているのを、他人事とは思えない	0.26	0.34	0.27	0.18
⑧ 障害のある方と接している自分が、世間からどう見られているかが気にならない	0.20	0.21	0.24	0.14
⑨ 今の社会には、障害のある方が普通の生活をできないような、さまざまな障壁が多いことに気づいている	0.32	0.33	0.32	0.32
⑩ 今の日本では、障害のある方が、今の自分と同じ生活をしようとすると、多くの困難に直面すると思う	0.20	0.31	0.15	0.15
⑪ 建物入り口のスロープなど、障害のある方に配慮した設備があると自分もうれしくなる	0.35	0.46	0.35	0.24
⑫ 障害のある方は、「障害者」と呼ばれると、「いい気がしないだろうな」と思う	0.13	0.26	0.09	0.06
⑬ 障害のある方は、それぞれ人間として個性的な魅力があると思う	0.28	0.33	0.32	0.18
⑭ 障害のある方に対して、「はれもの」にさわるような接し方はしない	0.37	0.47	0.37	0.28
⑮ 障害のある方だからといって、遠慮ばかりするのではなく、人間として普通に接している	0.25	0.35	0.24	0.16
⑯ 障害のある方が、世間から不当な扱いをされたのを見聞きすると、「なぜ、こんな社会なんだろう」と考えることがある	0.23	0.35	0.22	0.10
⑰ 障害のある人にとって使いやすい設備は、だれにとっても使いやすいものだと思う	0.14	0.20	0.16	0.04
平均	0.29	0.39	0.29	0.17

(3) 前後の差

では、障害者意識に対する障害者スポーツボランティア活動前と後の値の差はどうなっているのだろうか。ここでは、活動前の値から活動後の値を引いた値を表 3 に示している。

全体的傾向として、ボランティア活動を経験することによって障害者意識がプラスに影響していることが明らか(0.29)である。障害者意識に最も影響(効果)があった項目は、直接的ボランティア群、中間的ボランティア群共に①「自分は、障害のある方に対して偏見を持っていない」、その差も同じく 0.57。間接的ボランティア群では、

0.32 の差で⑨「今の社会には、障害のある方が普通の生活をできないような、さまざまな障壁が多いことに気づいている」となっている。さらに、注目すべき点としては、各群の活動前と活動後の平均の差である。その差は、直接的ボランティア群 0.39、中間的ボランティア群 0.29、間接的ボランティア群 0.17 とそれぞれのグループに及ぼす影響(効果)に差異が認められた。

以上、ボランティア活動実施前後の障害者意識について、その前後の値の差からも明らかのように、差異が認められた。また、クライアントとの空間的・関係的な近接性を基にグループ分けされた 3 群間によってもその影響(効果)の程度に違いがあることが示唆された。

#### 4) バリアフリー意識

ここで、ゴールドカップの開催された北九州市のバリアフリー対策に対して、どう思うか訊ねたところ以下のような結果が得られた(表 4 参照)。

表 4. バリアフリー意識

	全体	直接	中間	間接	N(%)
十分対応している	25 ( 7.3)	5 ( 4.8)	14 ( 9.5)	6 ( 6.5)	
ある程度対応している	177 (51.5)	51 (49.0)	66 ( 44.6)	60 (65.2)	
やや対応不十分	114 (33.1)	41 (39.4)	53 ( 35.8)	20 (21.7)	
全く対応不十分である	28 ( 8.1)	7 ( 6.7)	15 (10.1)	6 ( 6.5)	
合計	344 (100.0)	104 (100.0)	148 (100.0)	92 (100.0)	p<.05

全体では、「不十分(やや+全く)」と回答した者の割合が 4 割を超えている。また、3 群間の値を見てみると「不十分」と回答している者の割合が 27.2%を示している間接的ボランティア群に対して、中間的ボランティア群で 45.9%、直接的ボランティア群では 46.1%とさらに上昇している。また、この値の差には、5%水準の危険率で有意差が認められている。

#### 6. 結果の要約

ここでは、障害者スポーツボランティアがそれに従事するボランティア活動者の障害者意識にどのような変容をもたらすのか。また、スポーツボランティアの役割構造からみた、クライアントとの空間的・関係的な近接性の違いに着目し、その違いがボランティアの意識変容にどのように影響するのかを検討した。

その結果、①障害者スポーツボランティア活動によるボランティアの活動前と後との障害者意識には差異が認められ、活動後に、より肯定的意識が高まる効果をもたらすことが示唆された。②また、障害者意識の変容の程度は、クライアントとの空間的・関係的な近接性の違いによって異なり、その効果はクライアントと直接的に関係を持つ機会が多いほど意識の変化にプラス効果が作用されることが明らかになった。また、その意識は身近なバリアフリー対策に対する意識にまで影響(効果)を及ぼすことが示唆された。

引き続き、障害者スポーツボランティア活動におけるボランティアの意識変容についてさらなる探求を進めるため、意識変容尺度項目を用いて特性因子を抽出し、関連項目との関係性の検討を試みる。

注1)川元は、「ボランティア活動による活動者個人の変容」の代表的な視点として「自尊感情」、「自己実現傾向」、「援助規範意識」、「向社会的行動」、「社会的効力感」、「福祉教育・ボランティア学習活動による参加者個人の変容」、「サービスマーケティングにおける評価視点」、「ボランティア活動意欲」の8つを挙げ、さらに、それぞれに対応する測定尺度も提示している。

#### 7. 参考引用文献

- 1) 川元克秀:ボランティア活動による活動者個人の変容、ボランティア白書 2001、pp. 158-172、社団法人日本青年奉仕協会(JYVA)、2001.
- 2) 川元克秀 他:福祉教育・ボランティア学習活動による学習者の即時的変容の内容とその意味. 日本福祉教育・ボランティア学習学会年報、4、pp. 82-110、1999.